

「分子生物学・免疫学キーワード辞典」

京都大学胸部疾患研究所教授・細胞生物学 永田 和宏
 自治医科大学教授・生物学 長野 敬
 東京医科歯科大学難治疾患研究所教授・ウイルス免疫疾患研究部門 宮坂 信之
 大阪大学医学部バイオメディカル教育研究センター教授・臓器制御学研究部 宮坂 昌之
 編集

東京女子医科大学内科教授・膠原病リウマチ痛風センター所長

柏 崎 禎 夫

当然のことながら、言葉が通じなければコミュニケーションは成立しない。論文を読んでも講演を聞いても、ほんのわずかばかりの術語が理解できなかったばかりに、内容が今一つ納得がいかないような、あるいはなんとなく未消化に終わってしまったような無念さを味わった経験は、どなたにでも大なり小なりあるのではなかろうか。こういう場合に活用されるのが各種の用語辞典である。

医学関係の用語辞典も今までに多種類のものが出版されてきた。しかし、従来の辞典で収録されている用語は、通常その概念が定着し、一般化されているものに限定されていることが多い。したがって、新しい用語や概念を調べるには不向きである。しかも、1つの用語を解説するのに使われる字数に制限があるためか、解説の仕方に軽重がなされておらず、用語の由来・成り立ちはもちろんのこと、用語間の関連性や実験の原理・技法の詳細までも知ろうとすることは多くの場合、無理である。

さて、近年の分子生物学・免疫学

の領域の進歩は著しく、次から次へと新しい知見が発表され、新しい概念・術語が誕生し、その数は膨大にのぼる。臨床医学に身を置いている者にとっては、それぞれの術語を理解するのにそれこそ四苦八苦し、覚えるのにも汲々としているのが実情である。基礎の研究者でも分野が少しでも異なれば、恐らく同様ではなかろうか。

こういう時期に「分子生物学・免疫学キーワード辞典」が発刊されたことは、極めて時宜を得たものであると言わずしてなんと呼ぶべきであろうか。まさに私たちが長らく待望していた辞典であると言っても過言ではあるまい。本書は分子生物学・免疫学を理解するために必須と思われるキーワード約1,600語を収録し、その語義を正確かつ簡潔に解説しており、論文を読む際にしばしば立ち往生していた事態を解消してくれる分子生物学・免疫学の解説書でもある。

本書での類書にみられない特徴をいくつか挙げてみよう。

(1) 最新の用語については、馴

染みが得られるようにその名の由来・成り立ちや呼び名の説明がなされている。

(2) 広く用いられている実験の原理・技法・装置などの説明のみならず、その手順にも解説が加えられている。

(3) 図表を多用して理解を容易にさせてある。接着分子、オンコジーン、インターロイキンやCD分類などについては、その全体を関係付けて把握できるような工夫がなされている。

どこの家庭でも国語辞典の1冊や2冊は備わっているように、すべての医家に本書を必携の書として推薦したい。もちろん、医学生にとっても大いに役立つ。最後に、本書の性格上、完結ということはありません。定期的な改訂して新しいキーワードを追加し、up-to-dateな辞典としての装いを常に備えておくことを要望したい。

● A5 528頁 図181 写真7 1994
 定価 7,725円(税込) 〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)